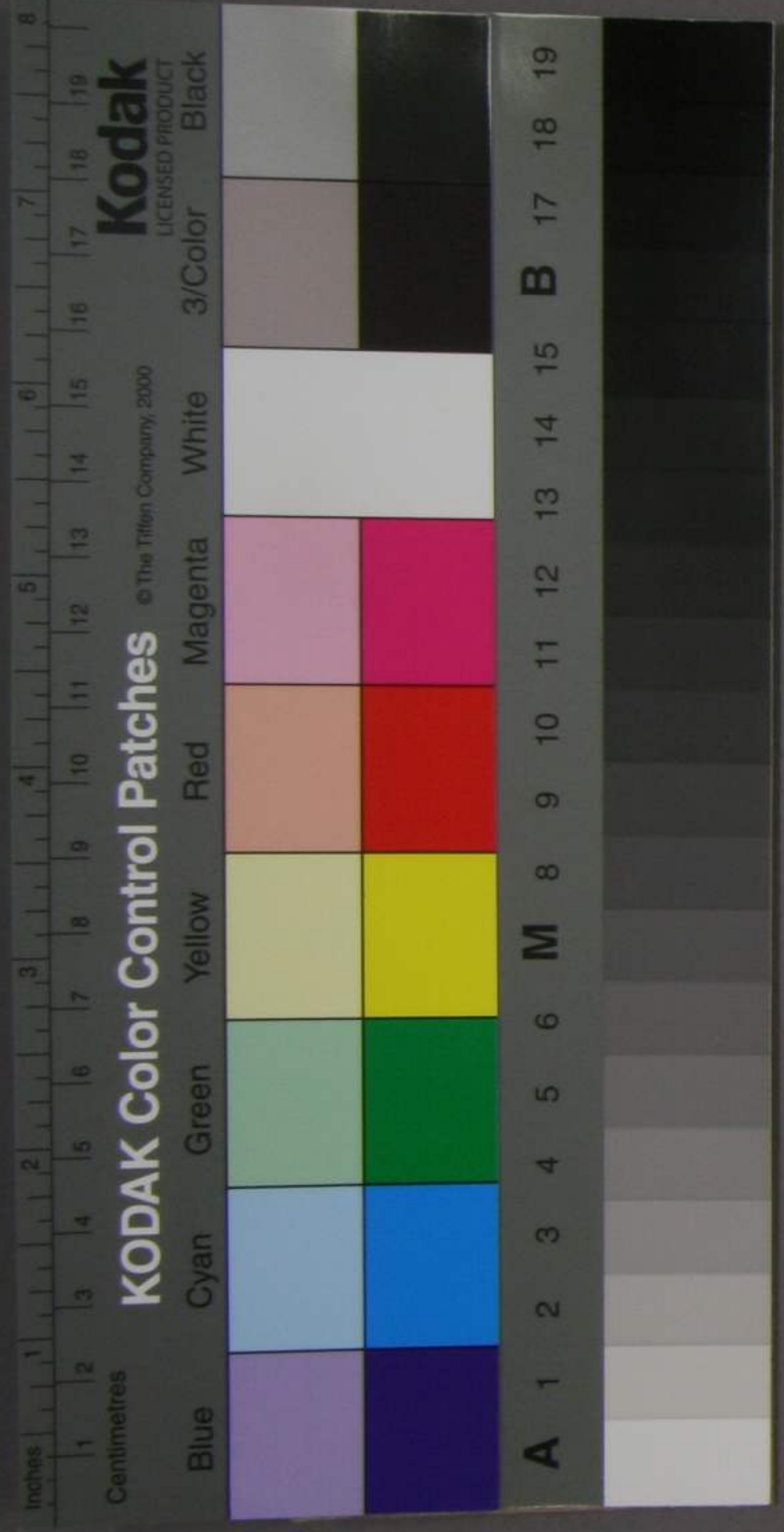


114
A 1917



租稅豫算決算ノ義従前其徴收スヘキ年度ヲ
 以テ完結スル成規ニ有之候處右ニテハ前年
 度分ノ完結ヲ翌年度間ノ中ニ完結シ能ハサ
 ルノ情實アリ取立後六ヶ月ノ後ニ至ラサレ
 ハ上納シ難キ郵便税アリ開拓使ノ根室支廳
 ニ於ル静岡縣ノ八丈島鹿兒島縣ノ大島外四
 島ニ於ル何レモ道路遠隔渡海梗塞等ノ難ア
 ツテ延滞ニ係ルモ例年常ニ然リ其他各府
 縣ニ於テモ種々ノ事故アツテ延期セサルヲ
 得サル部分アリ到底是カ完納ヲ要スルハ該
 年度以外一年有餘ノ日子ヲ要ス加之進達
 セル税帳ヲ詳査スルニ當ツテ重複脱漏ノ弊
 ナキ能ハス是ヲ推尙往復又夥多ノ日子ヲ消

大正十一年四月
 隈侯爵郵寄贈



費セザルヲ得ス税金税帳各其額ニ適當シ該
年分完結決算ニ至ツテハ殆ント三兩年ニ跨
越スルニ至レリ年々豫算表ヲ製シ上呈スル
モ兩三年ニ跨越スルニ非レハ是カ完結ヲ得
難シトセハ理財上實際收支ノ需要ニ踈ク入
出決算ノ期ニ遠ク結局新設必要ノ豫算モ全
功ヲ實際ニ奏スルヲ得ス依之熟考候處從來
租税ノ計算法ヲ更メ是ヲ二途ニ分チ第一途
ヲ歳入計算法トナシ其法タル該年度内ニ現
収入スヘキ納額即チ甲乙部
準備ヲ合スヲ査定シ以テ該
年度豫算表ヲ製シ是カ完結ヲナスヤ該年度
六月三十日迄ニ現収入セル納額即チ甲乙部
準備ヲ合ス
ヲ以テ豫算ト差引増減ヲ算出シ是ヲ該年度

歳入計算法ノ終焉トス其第二途ヲ徴收計算
法トナシ其法タル従前ノ如ク其徴收スヘキ
年度ノ豫算表ヲ製シ該年度間ノ收入ハ總テ
何ヶ年ニ跨越スルモ該年度内ニ編入シ該年
度ノ徴收完結ヲ得該豫算ト比較増減シ該年
度分徴收計算法ノ終焉トス如此スレハ理財
上ニ於テ實際ノ需用ニ適當シ是カ豫算表モ
大ヒニ標準タル便宜ニ供スヘク歳入歳出ニ
関スル計算モ該年六月三十日ニ於テモ該年
分ヲ決算調整スルヲ得租税決算ノ整頓ニ
至ル速カタリトス又該年度分トシテ組織ス
ル徴收計算法ニ於テハ歳入出ニ現ニ関與セ
ス該年度分ノ結果ヲ要スルヲ主トシ年間ハ

三兩年ニ跨ルモ今日ノ如キ税外トシテ別途
納又ハ準備入等ノ推法ナク完全ナル一今年
分ノ租税完結ヲ得テ第二豫算ト差引詳明ナ
ル比較増減ヲ調成スルヲ得ヘシ是則テ外ニ
シテ歳入ノ決算ヲ速ニ奏スルヲ得内ニシテ
ハ徴收ノ完願ヲ編成スルヲ得計算上兩得ノ
義ト愚考仕候方一御採用相成事モ候ハ、尚
ホ詳細ノ義ハ口頭ヲ以テ縷陳可仕候頓首

明治十年十月廿四日

租税局長吉原重俊

大藏卿大隈重信殿